
私は次の水菜様

時雨瑠奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は次の水菜様

【Nコード】

N6913M

【作者名】

時雨瑠奈

【あらすじ】

私が生まれたのは、水菜様の伝承がある村。幼いころに彼女をバカにした私の中に、入ってきた、水菜さま。私は彼女の呪縛から逃れられるの!?

私は香也清香^{かやさやか}。？水菜様？という伝承がある古東村^{ことうむら}で生まれた女の子である。

今は高校生一年生をやっていた。

水菜様とは、村の守り神だ。

祖母から聞いた伝承を語ると、昔水菜という美しい女がいた。

水菜はとてもやさしく、誰からも愛される娘だったが、

結婚を約束した男に裏切られたことから、

彼女はすっかり変わった、らしい。

水菜は村人を手当たり次第に殺したというのだ。

残虐に。子供も、女も、無差別に鉦^{かね}で

叩き殺した。悲鳴も、泣きじゃくる顔も、彼女には

通じなかった。

結局最後には、村人の最後の生き残り、

彼女が愛していた男が彼女を殺して終わったらしい。

その後、村は外から人を取り入れて、また普通の村

に戻り始めたが、水菜の呪いのせいで、恋人たちが

死ぬという事件が多発した。

水菜は、死ぬ間際、こんな言葉を残していったらしい。

「私は、私を裏切ったお前を、男を死んでも

恨み続けてやる」

と……。

その後、村長になったその元婚約者が、慰霊碑を

立て、守り神として祭りたてると、怪異はなくなった、

らしいのだ。

らしい、という言葉を多用していても許してほしい。

私は、実際にその時代に生きてはいなかったのだから、

そうとしか言いようがないのだ。

彼が裏切らなかつたらねえ、そう言った今は亡き祖母に、当時小学生だった私はバカみたいと言った。くすくすとおかしそうに笑った。

「男の人に振られたから殺すなんて、子供でもやらないよ」

私は良く言えば大人びた、悪く言えばなまいきな子だった。

その時の祖母の驚き、慄いた様子おののを、私は今でも

覚えている。そんなことを言うべきではなかったのだ。

水菜の悲劇を、なげいてやるべきだったのだ。

でも、言ったことは二度と取り消せない。

水菜の怒りも、悔しさも決して消えない。

私はそのせいで、第二の？水菜様？という運命を

背負うことになったのだった。

私は、その時はそんなこと、考えもしなかったのだけれど。

私は人の評価を聞くならば、美人らしい。

黒い髪は絹のようで、黒い目は黒真珠のようだ、

と大人たちは私を褒める。

だが、私は素直に喜べなかった。祖母は言っていたのだ、

水菜は、美しかった、と。私は中学生になるころには、

水菜の影におびえていた。

実際、私は年寄りたちからは恐れられている。

そばによるな！！ 水菜の再来だ、と。

小さい子たちや、村の大人、同い年の子たちは

そうでもなかったが、両親は私を疎んでいた。

否、恐れていたのかもしれない。

今はすでに死んでいるから、確かめようは

ないけれど。私は一人で暮らしていた。

この村では、出会いもなく、だいたいの者は、

大人たち、ほとんどが両親の仲介で婚約するものがほとんどだったが、私は誰も紹介されるものはなかった。当たり前だ。

両親はすでにこの世にいないのだから。

私は、高校生になっても婚約者の一人もいなかった。

私が？水菜？の存在を意識し始めたのは、友人に一人の男を紹介された、その時だった。

彼女の記憶が流れ込んできたのだ。怒り、悲しみ、口惜しさ、すべてが流れ込んできた。痛みも。

人を殺す感触も。痛いほどに握りしめた鉈の重みも。血の匂いも、口に入ってきた返り血の味も。

好きだった男にさされた痛みも。

私は気持ちが悪くなり、友人に頼んで家まで送ってもらった。そして、水菜はだんだん私の？中？に深くはいつてきた。

私は毎夜、水菜の夢を見るようになったのだ。

夢の中で、私はもちろん？水菜？だった。体が勝手に動き、水菜の役割を演じている。水菜が愛した男は、村娘に一番人気のある男だった。両親の仲介で、彼にめぐりあったのだ。

水菜は村長の娘で、何より一番美しかったので、反対するものは誰一人としていなかった。

水菜は男と愛し合い、なんと今の私の年、十七歳で、妊娠していたのだった。

殺された時も、まだ子供は生まれていなかった。ただ、臨月ですぐにも生まれそうだったらしい。

その子供はどうなったんだろう。私はゾッ、となった。母とともに死んだのか、それとも誰かに育てられたのか。

詳細は分かっていたいなかったようだ。私の祖母も、子供の事は一言も言っではいなかった。

「なんで!? 私のどこがいけないんですか!?!」

そう考えている間に、夢はクライマックスにさしかかっていた。目から涙をこぼした水菜が、相手の男につめよっている。

彼の隣には、十人並みの容姿をした村娘がいた。

この村の娘ではないらしい。娘は勝ち誇ったように、彼にしがみついていた。彼が彼女を愛しそうに見る。

? 駄目、水菜、やめて!!!?

私は叫んだ。が、水菜には届かない。

当然だ。私は、その時にはその場にはいなかったのだから。

「君が悪いんじゃないんだ。僕は、この子を愛してしまった。だから、君とは結婚できない」

「子供だっているのよ!!! もうすぐ、生まれるのに」

「すまない……」

水菜はその場にへたり込んだ。美しい着物に、土の汚れがつく。ぼろぼろと涙が流れた。悔しい。なんで!?!

なんであんな子が私よりも愛されるの!?!

素直で無垢な少女は、もうそこにはいなかった。

近くにあつた鉈を掴む。男はギョツとしたように

こちらに向かつてきた。彼女から取り上げようとしたのだ。

「裏切り者!!! 死んじゃえ!!!」

水菜はめちやくちやくに鉈を振りまわした。服の袖が

きられてなくなる。腕から垂れた血が、地面に吸い込まれた。

男の顔に浮かんだのは、恐怖だった。

「危ないっ!!!」

娘が男をかばった。振り下ろされた鉈は、娘の頭をかち割る。

大量の血と脳漿が彼女の服と顔を汚した。

そのまま彼女はにこり、と笑う。夜叉のような顔だった。

彼女は鉈を下ろそうとはせず、すでにことくれた彼女の

体を切り裂いた。見開いたままの目をつぶし、服も体もズタズタに引き裂いた。血で染まった死体は、もう少女のものとも思えなかった。

「あや菜あああああつ！！」

男が彼女の名を呼び、嘆き悲しんだ。水菜は汚いものでも見るような目でそれを見て、死体を足蹴にした。

「次はあなたの番よ、俊彦さん」

私はギョツとなった。あやなと言うのは、私の友人の名前だった。偶然かもしれないが。

男は悲鳴を上げながら逃げ出した。

水菜が鉈を振るう。バキバキッ、とその場の木々が斬られた。

男はどこまでも逃げまどった。死にたくない。

その目はそう語っていた。

水菜はそれを追いかける。水菜はどこまでも追い詰めた。

たちふさがる村人を、邪魔なものでも見るように薙ぎ払いながら。

彼女のやさしかった目に今あるのは、狂気と怒り、それだけだった。

彼女の前には、ぐちゃぐちゃになった死体が山盛りになっていた。もとは村人だったものだ。子供も、大人もいる。

「どこへ行ったの？ 俊彦さん？」

くすり、と彼女は笑った。鉈をふりまわし、真っ赤な血を

したたらせる。鉈は鈍色にびいろだったのが、わからないくらい、血で汚れてしまっていた。

子供のように水菜が首をかしげ、彼を探す。

とー。

「水菜！！」

どすつ、と鈍い音がした。水菜の背中に、包丁がささっていた。

どす黒い色をした血がぼたぼたと滴り落ちる。

水菜はよろめき、さらに血を飛び散らせた。

「とし、ひこ、さん……」

「死ねっ！！ 水菜っ！！」

男の顔にも憎しみがあつた。愛した者を殺された、その憎しみが。今度は水菜がじりじりと下がった。目から涙があふれ出て、顔に付着した血を洗った。

もう一丁が今度は腹に突き刺された。水菜は立っていられなくなり、その場に倒れ伏す。震える手から鉈が落ちた。

その手も、顔もすべて血の海に染まる。

「私は、私を裏切ったお前を、男を死んでからも憎んでやる」

死ぬ間際の彼女が、にやりと笑った。まるで、ここにはいない私に笑いかけるように。私は思い切り悲鳴を上げた。

「いやああああああっ！！？」

私は水菜のことを忘れようと努力した。

友人と笑いあい、紹介された男と付き合ってみた。

男の名前は、登也利彦とせりひこといった。

聞いた当初はギクツとしたものの、あの夢の俊彦とは

似ても似つかない顔立ちだったので私はホッとしていた。

あやなだつて、あの夢のあや菜とは違う。

私は水菜なんかじゃない。そう思いたいのに、夢は続いていた。

もう、あの夢は見ないけれど。

今見る夢は、水菜と私が向かい合って立っている夢だった。

「あなたは私。私はあなた」

水菜はそう言って笑う。悪魔のような笑い方で。

「違っっ！！ 私の名前は清香よっ！！ 水菜なんて名前じゃない

！！

私はあなたにはならないっ！！」

水菜はただわらっていた。本当にそうかしら、とでも言いたげに。

「もう私を解放してよっ！！ バカにしたのは悪かったと思う。

だけど子供のたわごとでしょう？」

「子供だろうが大人だろうが、私を笑うのは許さないわ。それに、それだけじゃないの。私たちは似ているわ。としひととあやな。美しい顔立ちさえも」

「やめて、もうやめてええええっ!!」

そこでいつも夢からさめる。水菜は決して私を許しはしない。私に、水菜と同じ運命をたどらそうとする。

私はもう疲れていた。そして、利彦とあやなに全てを告白した。

二人は私の告白を黙って聞いていたが、だんだんと恐怖が顔に現れ出すのに時間はかからなかった。

この二人は私を恐れている。大事だと、大切だと言ってくれたのに。

許せなかった。裏切るなんて、許せない。

許せない許せない許せないっ!! 裏切り者っ!!

「裏切り者っ!!」

水菜の声が頭の中で蘇る。私は、この瞬間第二の水菜となった。

私は、私の中の？水菜？が命じるままに、二人を呼び出した。

彼女と同じように、鉈を後ろ手で隠し持って。

私の体内には、水菜と同じように子供がいた。利彦の子だ。

私たちは愛し合っていた。あの告白をする前は。

告白を聞いた瞬間、利彦は私から去って行った。あやなも。

二人はビクビクしながら私の言葉を待っていた。

「利彦さん。あやな。よく来てくれたわね」

利彦の顔が青ざめた。私は、彼を利彦、と呼び捨てにしていたのだ。

水菜とは違うと思ったくて。だが、もうその必要はない。

私は水菜だった。人を残虐に殺しまわった水菜。

血にまみれた水菜。まるで夜叉のように。

「もう安心して、水菜。私があなたの痛みを終わりにしてあげるから。もう第三の水菜は生まれない」

私は、二人を殺した後、お腹の子と一緒に死ぬつもりだった。「さ、清香？　ねえ、冗談でしょう？　私たち、友達よね」泣きそうな顔で、あやなは後ずさった。

鉦を構える私から逃げようとする。だが、私は逃がさない。鉦を彼女に向かって振り下ろし、彼女の腕にパツ、と血の花が咲いた。悲鳴を上げ、さらにあやなが下がる。

「友達？　私を裏切ったあなたが？　それこそ冗談でしょう？」

「清香っ。私、裏切ってなんかないよ！！　正直言っただけで怖かった。ただ、あなたと向き合おうとしたの」

「清香。落ち着いてくれ、オレはまだ君を愛してる」

私の目から涙があふれた。水菜とは違う涙だ。

だが、全ては遅かった。私はすでに水菜だった。

村人たちは、全員殺したあとなのだから。

水菜と同じように、その手は血にまみれているのだから。

「ごめんね、信じられなくて」

だったら、私が消えるしかない。

すべてを終わらせるのは、私しかない。

私は鉦を自分の胸に突き刺した。血がその場にあふれ出す。

何度も何度も突き刺した。あたりが血の海になるまで。

自分が死にそうになるまで。

私は、自分の子供ごと消える。水菜のもとへ行ってあげる。

「「清香っ！！」」

「みずなが、待ってる、から……」

私はその場に倒れこんだ。もうくらくらとして目が見えない。私は、最後に二人に見守られ、笑っていた。

私は十七年の人生に、自ら終止符を打った。

水菜のように、一番大切なものを殺さないで。

だが、私は知らなかった。水菜の復讐は、
まだ終わっていないことを。

私の子供、第三の水菜は生きていることに、きづいていなかった。
私は死んだが、さやなと名付けられた私の娘は、
なんとか生きていたのだ。

私の子供は、利彦とあやなに育てられたが、大事な親を
、二人を、第三の水菜として鉈で叩き殺すことを、
死んでしまった私は決して知ることはないのだった。

第二の水菜は、消えない罪を、娘に受け継がせて
しまったのだった。彼女の中に元はいた、水菜とともに。

そして、水菜は第四、第五の、といつまでも続く
怨嗟えんさの中でわらっているのだった。

(後書き)

初めての一人称&ホラーです。
最後がちよっと変ですが、どうか
見てやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913m/>

私は次の水菜様

2010年10月17日22時48分発行